

秋季大会シンポジウム司会記

塩 沢 一 平

大伴家持の生年は、いくつか考えられる。『公卿補任』

の天応元年（七八一）に「六十四」とあり、天平四、五年頃の歌があることなどから、大方は養老二年（七一八）生まれと考えている。これに従うならば、数え年で二〇一七年、満年齢で二〇一八年が大伴家持生誕一三〇〇年となる。人や出来事の節目となる年にそれに焦点を当てて考える、それは研究の停滞を防ぎ、再評価のきっかけにもなり、意味あることと考える。当学会シンポジウム担当者は、このことを念頭に置きながらも、シンポジウム開催に別の意味づけを考えていた。

それはテーマにも「研究の最前線」とあるように、上代文学研究の最前線を学会内外の方々に広く理解して頂きたい、ということであった。その題材として、誕生一三〇〇年という節目を迎え、また活発な研究活動が行われている

大伴家持を選んだわけである。

現在は、研究の最前線・研究の水準というものがわかりにくい時代となっている。かつては『国文学 解釈と鑑賞』『国文学 解釈と教材の研究』『文学』などの月刊誌が特集でそれを語り、『〜必携』『〜事（辞）典』などという形でそれをまとめていた。『国語と国文学』も大きな書店なら手に入った。これらが休刊・あるいは季刊化し、また手に入りにくくなった現在、研究の最前線を多くの人々が理解するのは容易ではない。また、領域の細分化・学際化により、同じテーマについても様々な角度からの最前線が考えられる。そんなことから、例年は三人のパネリストによって行うシンポジウムを、今回は、年代や研究方法に重なりが少ない四人にお願いして開催することとなった。

松田聡氏は、語句・表現などの詳細な分析により大伴家持作品全般にわたって堅実に研究を積み重ねている。鈴木道代氏は、家持作品を中国文学・詩学との関係から比較文学的に研究を行う気鋭の研究者である。鉄野昌弘氏は、大伴家持研究の第一人者として広く知られている。多田一臣氏は、万葉のみならず広く上代文学研究を牽引するオーソリティーである。この四氏をパネリストとして、討論となるように具体的には巻二十を題材とすることとなった。以下に「シンポジウム 主旨」を再掲する。

大伴家持は、一九七〇年代まで「創造において野心的な試みは、ほとんどない」（北山茂夫）、「彼の表現には模倣のあとが著しい」（尾崎暢殃）というように評価は低かった。八〇年代以降、ニュートラルに作品を分析する機運が高まり、多数の論文著書が出版され評価は大きく変わってきた。

秋季大会シンポジウムでは、これまでの研究の累積を踏まえつつ、新進から重鎮といわれる四人の研究者の発表と会場を含めた討論によって、大伴家持研究の最前線を示していきたい。

今回は、万葉集の最終巻にあたり、また家持最終歌も含む巻二十を中心に、その最前線を考える。巻二十は、家持歌以外の作歌・宴席歌・防人歌も含まれ、ま

た「拙懐」「依興」「独」など家持研究のキーワードが含まれる巻である。更に大伴氏の存亡に関わる「橘奈良麻呂の変」時を含む巻でもある。様々な角度から最前線の大伴家持研究が語られるのではないかと考える。事前の打ち合わせでも、四氏の考えにはかなりの違いがみられた。当日のシンポジウムでは、会場からの意見も加わり、活発な議論が展開するのではないかと考えている。

シンポジウムは、二〇一七年十一月十一日（土）午後二時より五時半まで、二松學舎大学一号館二〇一教室において開催された。シンポジウムは、広く公開されており、例年会員外の社会人や院生・学生の参加者も少なくない。今年度は約二百人の参加者で、教室が一杯となるほどの盛況であった。パネリストの方々は、一人二十五分という短い時間にも関わらず、コンパクトに発表をまとめて下さった。また、発表者と会場をつなげる質疑応答も活発に行われた。これらの点から、多くの人々が最前線を理解するという目的は達成されていたと考える。

ただ、討論の応酬を経て、新たな一致点を見出すという、シンポジウムフォーラムのフォーラムとしての展開が必ずしも十分なされたとは言えなかったように思われる。これは、最前線を広く理解するということと裏返しの関係にな

る。発表は同じ卷二十を中心としつつも、前述したように、研究方法や注目点が異なる。人文科学にはタメにする議論や性急な一致点を見出す必要はないといえるかもしれないが、焦点を絞って議論を深める形に、必ずしも進まなかったように思われる。これは、発表者が多く議論に十分な時間を割り当てることができなかった点もあるものの、偏に当年シンポジウム責任者で司会担当でもある私の責任である。

会場からの意見、さらに討論を踏まえて、四氏は論をまとめられていく。司会者も、私的であるが、本誌上でシンポジウムの続きとして、家持研究の糸口として一点まとめてみたい。

会場からの意見として、万葉集は史書などを対応させて読み解くのではなく、テキスト内部で理解していくべきではないかということが提示された。これは多田氏が万葉を表現史として理解すべきであると述べるように、ことばが抱えている（政治情勢も含めた）古代的な世界観から理解する必要があるだろう。卷二十は、歌日記（誌）の形を見せ、史書との対応を要請している。家持はその政治情勢に対して鉄野氏が論ずるように、容易に心情を詳細に明かさない韜晦が見られる。それは「いざ子どもたはわざなせそ」と事件を起こした橘奈良麻呂を非難するものとも詠め

る。仲麻呂の四四八七にも反映している。この歌は、直前の皇太子大炊王歌と合わせて、松田氏が指摘するように、卷四巻で繰り返し現れる、君臣和楽を体現するものとして理解もできる。逆に鈴木氏が「依興」を中心に述べるように、仲麻呂批判が余意として示唆されているとも解しうる。このように歌日記（誌）として当時の政治情勢に寄り添いつつも、歌の表現や組み込まれた他者の歌には、韜晦が見られる。その韜晦は、卷二十の読み手に二重に理解できる文脈を生み出している。このようにもまとめられよう。発表者からは、恣意的で強引なまとめと非難されるかもしれないが、それもシンポジウムの続きとしてお許し願いたい。

なお、新沢典子氏による、本シンポジウムについて詳細な報告と批評が、笠間書院のホームページに掲載されている（「二〇一七年度上代文学会秋季大会シンポジウム『大伴家持研究の最前線—卷二十を中心として—』報告」）。合わせて御覧頂きたい。